

Kvazaŭ ĉio dependus de mi

verkita de Trevor Steele
eldonita de Flandra Esperanto-Ligo, 2009
343 paĝoj

本書の表紙には小さな写真が掲載されていて、大柄な看守に見下ろされるようにして小柄な男が壁際に立たされている。写真でははっきりしないが、その男の左肩には562という囚人番号が縫いつけられている。

この男は、カール・フォン・オシエツキー（1889～1938）といい、この写真は彼がエスターヴェーゲン強制収容所に収容されていた1934年に撮影された。彼はドイツの著名なジャーナリストで、雑誌『世界舞台』に拠って国防軍や台頭するナチズムを常に鋭く批判し、逮捕されて強制収容所に収容されていた1936年にノーベル平和賞を授与されるも、政府が出国を許可しなかったため授賞式に出席できず、第二次世界大戦の前年に病死した。

本作品は実在したこのジャーナリストをモデルにした作品であり、ナチスの権力掌握に至るプロセスや彼の生涯を踏まえている。ただ、オシエツキーは1938年まで生き延びたが、小説の主人公のクルト・レンツは1934年に強制収容所で銃殺されて死ぬ。以下この小説に即して書いてみたい。

物語の語り手はエーリヒ・シュワルベといい、レンツの同級生、義兄、さらには同僚として、レンツの公私の生活を最も身近に知るという設定である。エーリヒは1933年スイスに亡命し、さらに1939年にオーストラリアに移住、ベルリンの壁が崩壊した翌年の1990年、90歳の高齢に達して、この回想を執筆し



た。これがこの物語の枠である。

さて、レンツはハンブルクに生まれ、ベルリンに出て、やがて雑誌Nova Folioの編集長に就任し、国防軍やナチスを鋭く批判する記事を掲載し、自らも毎号執筆する。そのため国防軍から憎まれ、懲役刑の判決を受けて入獄したりする。この小説は議論小説とでもいうのか、登場人物たちがときどきの政治状況について果てしない議論を繰り広げ、当時のベルリンの左翼知識人サークルの沸騰する知的雰囲気や、日本でもよく知られたクルト・トゥホルスキーなども登場する。

1929年に世界大恐慌が発生し、その混乱を背景にナチスが台頭する。彼らはドイツが第一次世界大戦に敗れたことに深い怨念を抱き、敗戦後に成立したワイマールの民主主義体制を憎悪し、それを破壊することを目的として政治活動を続ける。1933年1月にヒトラーが首相に就任するや、反対政党、知識人、ジャーナリストなど批判者を次々に弾圧し、さらには1934年6月に身内のレームらも虐殺して、絶対的権力を掌握するに至るのである。

知識人、ジャーナリストに対する弾圧の危機が間近に迫りつつあるなかで、同僚たちはレンツに亡命をすすめるが、彼はそれを拒否して、こう述べる。本書のタイトルの由来である。“Eble, Kant tro influas min … sed mi devas agi, kvazaŭ ĉio dependus de mi.” (p304)。たとえ自分の運命がどうなるうとも、ドイツにとどまって事態の推移を見届け、これを世界に伝えることがジャーナリストとしての自分の義務である、というのである。その姿は殉教者を思わせる。彼の最後を扱った章は、「カルバリ（ゴルゴタ）への道」と名づけられている。1933年2月27日の国会議事堂放火事件の直後、彼は逮捕され、強制収容所に収容されて、翌年銃殺される。

この作品は、戦間期ドイツという激動の時代を生きたジャーナリストの生涯を精緻に描いていて、細部を読み込むほど興味が深まる。反面、その時々政治状況を知らないと、引用されているレンツの舌鋒鋭い文章はよく理解できないかもしれない。さらに、彼のレトリカルな文体（大部分はオシエツキーの文章がそのまま引用されているようである）そのものが私にはむずかしい。また、ハーゲン・ヒルシュトロームという、もうひとりの同級生が何度も登場するが、彼は早くから反ユダヤ主義に魅かれ、SA（突撃隊）に加わるも、レーム事件を機に亡命し、レンツの遺書をエーリヒに伝える役割を果たす。この人物の登場のさせ方などに、ややご都合主義的な印象を受ける。

レンツの逮捕から1か月後の1933年3月24日、授権法（全権委任法）が施行され、政府は議会の承認なしに法律を制定できることとなり、その法律は憲法に背反しうることとされた。授権法により、憲法は空文化、三権分立も空洞化し、権力は首相に集中して、戦争への準備が加速されていった。これは戦間期

のドイツでの出来事なのか、それとも、われわれの眼前で進行しつつある事態なのだろうか。

なお、著者自身による英訳As Though Everything Depended On Me (Mirador Publishing, 2012) が刊行されている。

(La Movado 2015年12月号掲載。なお、転載にあたって一部表現を改めた。)

